

高齢者とのドラマセラピー

尾上 明代

8. 想像力から変容へ—花子さん

高齢者施設のデイサービスにおけるドラマセッションについて執筆して来た。毎回、まず大広間で全員に向けて20分程度、その後10人前後の参加希望者に1時間程度のセッションを実施する。何年か継続していくうちに、後半セッションは、オープングループとはいえ常連の方が何人かいるので、ドラマを通しておなじみの仲間たち、という緩いコミュニティーが出来ているように見受けられる。ワーク内容も試行錯誤したのち、全員セッションでは、ドラマセラピストが観客をできるだけ巻き込みながら劇を演じ、アクティブに見ていただく時間をとり、また後半グループのメインワークでは、古今東西のおとぎ話や童話を参加者に演じてもらうようになっていた。

今号では、継続的に参加された花子さんのことを記したい。彼女について、スタッフから得たていた情報は、軽度の認知症であることと、他の利用者さんたちに大きな声や強い口調でものを言うことがあるため、孤立してしまうことがあるということだった。花子さんの参加開始時から1年少しの間、複数のスタッフが繰り返しこのようなコメントをしていた。ドラマセッションでも、自分の主張を臆せず発言され、また進んで主役に立候補することが多かった。特に初期のころは、〇〇のお話の△△役がやりたい、ということより、「主役」がやりたいという気持ちが私に伝わって来た。積極的で良いと思えたし、主役をしているという認識が彼女の気分を満足させるようで、それは良いことであった。ただ、周りには概して控えめな方が多く、主役を率先してやりたいという方がいない中では、少し目立つ存在だったかもしれない。「ズバッ」という言い方なので、強い印象も与えていた感じだった。その雰囲気は、「役」でもまったく同じで、施設のスタッフからも「普段の感じがドラマでも出ていた」というコメントがあった。

反抗・対抗したい気分

まず印象に残ったのは、初回参加時のドラマだった。その日は、「花咲か爺さん」で花子さんは、花咲か爺さん（＝主役）の役をして下さったのだが、悪いお爺さんから「お宅のポチを貸してくれ」と頼まれたとき、嫌だと言って貸さなかった。ポチが生きたままお話が進行したのは面白かった。もちろん、元のストーリーではポチを貸して、悪いお爺さんにポチが殺されるということは理解して下さっていたと思う。しかし、実際に役になり即興で演じる段になると、高齢者でなくても、自分の気持ちを反映させて演じる人はとても多く、花子さんも例外ではない。彼女の場合、ポチが殺されなくなかったのが貸さなかった、というより、単に頼まれたことに応じたくない、という気分なのが感じられた。このようなことは頻繁にあったが、即興で演じるときの感情は、本人の真の感情が使われている可能性が高い。ゆえにドラマの中の言動を、セラピストが他のメンバーとともに「新たなストーリー」として受け入れることは、つまり、その人の「言動」＝その人そのものを受け入れることと同義になる。現実の対人関係では、孤立するようなことがあったのかもしれない。でもドラマという場の「お爺さん」の言動なら、受け入れられやすい。現実のその人の言動ではなく、役という衣をかぶせて本当の感情を表現するという構造そのものが、ドラマセラピーの理論的根拠の一つなのだ。回を重ね、このグループプロセスを繰り返すことで、他のメンバー同士もお互いに受け入れる雰囲気波及し、習慣のように醸成されていく。言うまでもないが、こうしたプロセスを創り出すことは、すべての対象者群とのセッションにおいて必須だ。果たして花子さんは、少しずつ変化を始めたようだった。

自分を俯瞰する

開始後3ヶ月たったころ、ドラマに参加した施設スタッフから「花子さんが日常と違って柔らかかった。」というコメントがあった。「最近は慣れてきたのか笑いながら話すようになってきたかも」と感じたそう。

さらにその3ヶ月後、「白雪姫」をした回があった。もちろん白雪姫は花子さんだ。別の認知症の女性が意地悪なお妃になり、森の小人と住んでいる白雪姫のところに毒リンゴをもって訪問した。本来は白雪姫が毒リンゴを食べる話であったが、お妃役の女性は、筋を把握していなかったのか「リンゴはあげない！」と言う。すると、花子さんもしゃべり言葉に買い言葉で（？）「それならいらない！」とズバッと応答した。しかし、しばらくして、落ち着いた口調で我に返ったように「そういう話じゃないほうがよかったです？」と言い、毒リンゴを食べる白雪姫のストーリーに戻したのだった。参加者の状況や感情でセリフやストーリーが変わるのはとても興味深い、それとは別に、花子さん

が本来のストーリーに修正した言動は、心がフレキシブルになった証拠の一つでもあると考えられる。また今皆でやっていることを客観視し、自分の感情中心の心の状態から、程よい距離をもって対応したという点で、意義のある変化だったと感じる。

しかし、周りに気を配って自分のしたい言動を抑えるような方向には行ってほしくないし、そうしたことが目的でドラマ活動をしているのではない。もちろん孤立は良いとは言えないが、花子さんらしさは保ってほしいという側面もある。

高齢者に限らず、どのような対象者群であっても、受容的な場でドラマやゲーム遊びを媒介に、複数の他者との関わりを楽しむことを続けて行くと、当然、1人1人の個性が尊重されていることを参加者は無意識にも感じとるので、決して個性を殺す方向へは行かない。それぞれの個性が際立ちながら、お互いに尊重し合い、共生していくグループへと方向付けることを常に意識して実践してきたし、大きな社会のアナロジーとしてグループの場を創りたいと考えてきた。

花子さんの場合も、ドラマ内の言動が柔軟になったり、雰囲気柔らかくなったり、笑顔が増えたりしながらも、「反抗精神（！？）」は良いバランスで存在し続け、興味深いグループプロセスを創ることに貢献して下さった。このことを強く感じたのは、さらに半年後のセッションで「オオカミと7匹の子ヤギ」を実施したときのことである。

一致団結

この日は、幻覚幻聴が少しあるA子さんと鬱傾向のあるB子さんの2人が初参加された。物語は、母ヤギが出かけたあと、留守番の子ヤギたちを狙ったオオカミが家に来てくる。オオカミは声音を変え、粉を叩いて白くした足をドアの下から見せる。子ヤギたちは母ヤギと思い込んでドアを開けてしまい、1匹を除いて皆が食べられてしまうという話の流れである。ドアのところに最初に行く子ヤギを花子さんが演じた。ところが「お母さんが帰ってきた」とドアを開けるのではなく（もちろん！）彼女は「お母さんじゃない！」と主張したのだ。彼女の「騙されないぞ」というエネルギーは高く、それが起爆剤になった。他のきょうだい子ヤギたちに、楽しい反抗気分が伝播して、その後一匹ずつ、「花子さんヤギ」を真似した「お母さんじゃない！」が続き、誰もドアを開けなかったのだ。通常特に「反抗的」でない人もこの言動を多いに楽しんでいる様子で、それが子ヤギの一体感にも繋がり、初参加者を含めグループは、大きな盛り上がりを見せた。花子さんは、現実での「ズバッ」という「対抗精神」を抑えたりなくしたりすることなく、その感情はプレイフルな変化を遂げ、他者を楽しませるというところまで、まさに止揚されたのだと考える。

さて、話の続きに戻る。ドアを開けてもらえず臍を噛みながらオオカミ（トレーニー

の嶋村さんが上手に演じてくれた)が退散すると、最後に本物のお母さんが帰って来た。初参加のA子さんである。そこへ子ヤギたちが「お母さん！」と駆け寄る場面は、申し分のないクライマックスとなった。オオカミに騙されもせず、賢くお留守番をしていた子ヤギたちは、誰からともなく「おみやげは何!？」と聞き、期待が高まった。A子さんもアドリブで「スイカよ！」と応じた。実はこのときは2月だったので、スイカは季節外れだったが、A子さんは、必死に皆で食べられるものを考え、咄嗟にスイカ、と言ってしまったのだと思う。でも皆で美味しい美味しいと分け合って食べることができて、全員大満足の様子だった。セッション最後のシェアリングのときには、A子さん(母ヤギ)の演技を褒める内容や、昔お芝居をしたことを思い出した、などの感想が語られた。そして多くの人が、スイカが美味しかったと発言している。花子さんの演技が貢献してくださったことで、初参加のお2人にもすぐにグループに馴染んでもらえ、そして元気になって帰って行かれたことは非常に良かった。

食いしん坊!?

毎回、後半セッションの初めに、架空のものをパントマイムで人に手渡していくゲームをしている。架空のものが目の前にあると想像して、それにパントマイムで関わり、隣の人に順番に手渡していく。「それ」が自分の好きなものか嫌いなものかによって、参加者の関わり方もさまざまだ。例えば子犬が手渡されると、好きな人はそれを抱きしめるし、カエルの場合は、嫌いな人は気持ち悪いからと触らなかつたりする。食べ物の場合は、少しずつ食べて隣の人に回していくことが多い。認知症が進んできても、その瞬間は「目の前にあるもの」を想像して、皆さんは感情をこめて関わっている。そこには何もないのに、パントマイムで関わるうちに、それが本当にそこにあるように思えてくるワークなのである。

花子さんは、このワークで食いしん坊ぶりを発揮した。紅白饅頭を出したとき、他の参加者が紅か白かを好みで選んでいたが、花子さんは、「両方食べます」と言っていたし、お酒もたくさん飲んでいて、両刀使い(!)なのだろう。桜餅のときは「早く食べたいの!」と催促した。栗のときも「早く早く!」と手を伸ばして自分に回ってくるのがもう待ちきれない様子だった。焼きたてパンを、参加者が一口ずつちぎって食べて次に人に渡していき、花子さんの隣の人が最後の一口を食べるパントマイムをしたときは、「私はないの!？」ととても不満そうだった。そういうことがあったからか、とうもろこしがなかなか自分のところまで来なかったときは、「あんまりかじっちゃうとなくなっちゃうよ」など、食べられてしまうのを心配する発言が何度かあった。お団子のときは、他の人たちに食べられないうちにとばかり、初めに「全部、食べちゃう!」と言

って平らげたこともあった。他の人が、あまり好きではないものを食べずに渡したときでも「私何でもいただきます」とニコニコ美味しそうに食べていた様子を思い出す。

トレーニーの金光さんが蟬を「ジージー言ってます」といいながら出すと、他の参加者たちが、単に「ミンミンゼミです」とか、「1週間しか生きない。かわいそう」などと発言しながら手渡した中で、花子さんは「可愛くて食べちゃいそう」と言ったのだった。とても印象的だ。もちろん食べる動作はしなかったが、食べることと結びつけた、食いしん坊の発言自体がユニークだった。そう言った花子さん自身こそ、失礼ながら可愛かった。声にこそ出さなかったものの、心の中で、えへっとも言っているようなお茶目な感じがあり、「ズバツ」のイメージと随分と違うものであった。

素晴らしい想像力

空想の食べ物への花子さんの反応を書いてきたが、それに伴って驚きに値するのは、彼女の想像力である。「早く回して」とか「なくなっちゃう」「全部食べちゃう」などは、想像力なくしては発言できない。実際には何もないのに、素晴らしい想像力だ。認知症が進んだと言われる参加者も、過去の号で記したように、この遊びでは、今ここをとものに楽しむことができる。皆さんは、ふりをしているのではなく、本当に、それを「見て触って食べて」いる。特に食べ物を分け合いながら美味しくいただくのは、現実でもそうであるように、私たちの心を結びつける。実際にはない食べ物でも、想像力があれば、現実と同じ場、同じ社会関係を創造することができるのだ。

花子さんは、もちろん食べ物以外でも高い想像力を発揮するようになっていった。ひまわりが自分の番に来るまで時間がかかったときは「散っちゃうと大変」と心配したり、線香花火のときは、さらに臨場感を感じたようで、「早く！玉が落ちちゃう」と発言した。100万円のお茶碗では「落としちゃうと大変！」と慎重に扱っていた。でも、それは完全にその世界に入っているというのとも違い、想像の領域と現実の領域を同時に感じることができている心の状態であり、健康的だと感じる。金魚すくいをしたときなどは、(すくう紙が)「破けた！」と楽しそうにしている、このようなユーモアを発揮されたことがとても興味深かった。

欲張り？

上記のような想像力の高まりと同時に、ご自身の言動を、すぐにメタ的に客観視する

発言が出始めた。特に「欲張りな」自分に対するものだ。さらには、何かを他者と分かち合う言動も増えていった。

花子さんが桃太郎を演じたときは、(初めに記したように、主役をすることが実に多かった。) 鬼を成敗して持ち帰った宝物を、おじいさんとおばあさんに渡した。ドラマのあと、その宝物をどうするか、どのくらい欲しいかななどを皆で話したとき、「そうね、少しは欲しいかな」と言った参加者に続いて、花子さんは「私はいっぱい欲しい。」と言い、すぐあとに「欲張りかな？」と自分で突っ込みを入れた。

また、「おむすびころりん」で、打ち出の小槌を振って各人が願い事を言った際には、「私はお金ね。お金があれば何でも買える」と希望したが、実際にもらう段になると「たくさんもらいすぎると悪いことが起こると困るから」という理由ではあったが、皆に分けて下さった。

浦島太郎になったときも、花子さんは竜宮城のごちそうを前にして、「すごいごちそうだから一人で食べ切れない」と言って、皆でいただいた。

変容

このように、ごちそうや宝物を分けてくれる言動が見られるようになった花子さんは、さらに創造的になり、また同時に、単に主役だから気分がいいというのではなく、ドラマを仲間と楽しむ感じも高まっていく。例えば、「笠地蔵」でおばあさんになったとき、お爺さん役の人と軽快な受け答えで大変楽しそうに演じた。その日の「嬉しかった。幸せになります。」という感想は、それまでには聞かれなかったことばだった。

受容的な場、楽しめる場がそこにあり、そのなかで楽しむ力が出てくると、多重な関係性が可能になり、花子さんの変容が促されるのだろう。

つまり、頑なな態度に終始した行動がそのまま続行するのではなく、その行動そのものがドラマの役という枠の中でのものとなり、それを見てその役を統御し変化させようという自分がそこに登場してくる、という構造といえる。この役割の多重化は、ドラマの役のと看とどまらず、実際の自分を統御し変化させる自分を創りだしてくれるのだ。しかし、これらはプレイフルな気分がその場に、そして、自分にも充満していなくては、本来の頑なな態度が支配的な力をもったままになって、変容の機会が生まれない。繰り返しになるが、その態度そのものがプレイフルに演じられるとき、現実が少しずつ変形し動き出すのである。

笑顔

「浦島太郎」をやったときのことだ。玉手箱を開けて老人になった花子さんが扮する太郎を村人が誰も覚えていない、という場面で彼女が不満そうにしていると、「玉手箱の煙を浴びると若くなる」というアイデアが他の参加者から出た。花子さんは膝を打つような感じで、「それがいい！」と喜び、皆が若くなる場面ができた。セッション後の感想では「よかった。よかったわよね！」と大きな笑顔を見せた。

また、参加開始から1年2か月ごろの感想の時間に「色々親切にしてもらってありがとうございます」と話されたことがあった。このようなことばは初めてだった。この日はたまたま参加者が少ない日だった。セッションを担当した金光さんは、「花子さんはいつもよりおしゃべりが少なく、丁寧でゆっくり演じていました。今日のグループの雰囲気と時間に余裕があったからだと思います。」と記録に書いている。

「金の斧、銀の斧」のときには、欲の深い木こりの妻を演じた。欲の深い木こりは、正直者の木こりが神様から川で金の斧をもらった話を聞いて妻に話した。この辺から原作とは違うストーリーが展開する。妻の花子さんは「私も一緒に行きます！」と、積極的だ。川で神様から一旦は銀の斧を渡されるが、嘘がバレて返すように言われる。しかし彼女らしく「返さない」と、家に持ち帰ってしまった。夫婦は、銀の斧をどうするか相談をし、ここで妻の花子さんは「私持って帰っちゃいけなかった？」と自分の言動を振り返り、物語を元の筋に戻した。結局、神様からは銀の斧と引き換えに、自分たちの鉄の斧は取り返すことができた。

この日の最後のワークとして、各自の「夢を叶える」場面を創った。花子さんは、「欲しい物が見つからない」という。しばらく前、桃太郎の宝物を「いっぱいほしい」とか、打ち出の小槌で「お金がほしい」と言っていた彼女だが、希望はないのだろうか。重ねてお聞きしてみると、この施設に来るのが楽しいとのことで、デイサービスの朝の風景として脳トレやしりとりを職員とするシーンを演じてくれた。これは「夢を叶える」場面ではなく日常の場面であったが、この日の感想として「楽しかったです」と発言され、職員から「笑顔がいいですね！」というフィードバックを受けていた。

思いやり

花子さんは、結局2年半、継続して参加された。孤立傾向という職員の報告は、初回参加時から1年少し続いたが、少なくとも、職員からの上記のようなコメントは、それ以降は聞かなくなった。

その後、大変残念なことに、花子さんのデイサービスの参加曜日が事情で変更になった。彼女が最後に参加された日には私は行けなかったのだが、不思議なことに、花子さ

んの優しさが一番表現されたセッションとなったようだ。(ご本人もセラピスト側も、その日が最後になることは、その時点ではわかっていなかった。)

ミニ場面を演じるゲームで花子さんはお母さんになり「忙しくて、おやつまだ作っていないのよ。そうですね。あなたが一番好きなものを作ってあげましょう。」と相手役の子どもになった金光さんに言う。子どもが「私の好きな物って何かな？」という「そうね、ヒミツ！」とお母さんはウフフと笑ったそう。結局、おやつの中身はわからなかったが、この「優しいお母さん」は、その後のメインドラマでも登場した。その日は「アルプスの少女ハイジ」を実施したが、彼女はクララのお母さんになったのだ。クララのお父さん(花子さんの夫)役をしたのは、認知症が進みながらも持ち前の剽軽さと豊かな表現力で周囲を明るくして下さるC男さんだ。病気のクララが元気になるよう、家庭教師を頼んだりアルプスの山に送るなど、夫婦で協力していろいろ考える場面が演じられた。クララ役が「おかげさまで家族のみんながいるから、元気になりました」とハッピーエンドを迎えると、C男・花子夫妻は、良かった良かったと喜んだ。

最後の感想の時間でC男さんは、「大変だった。(みんなが)お父さん(=自分のこと)より良いこと言うからまいちゃった。今日はみんなありがとう。」と自分があまり役に立たなかったという感じの発言をしたそう。すると花子さんが、「お父さん(C男さんのこと)に助けられて楽しくできました。お父さんが良かった。このお父さんだからよかった。またご一緒しましょう。」とC男さんに伝えた。花子さんの「またご一緒・・・」というような発言は初めてだ。C男さんも嬉しそうだった。トレーニーの岩崎さんは、「花子さんの、相手を思いやるような発言が多く、何度も繰り返し強調されて『お父さんがいてくれたから』と相手を立て、とてもグループの雰囲気がよくなった」とジャーナルに記している。

当初から施設のスタッフが何度も言及していた花子さんの態度が、ドラマやセッションの中で柔らかくなったこと、自分を俯瞰的に見る発言が出てきたこと、また創造的な表現・楽しい様子・笑顔・ストーリーの中で他者と分かち合う言動が増えたこと、そして感謝のことばを伝えて下さったことなど、このような多くの種類の変化が同時多発的に発生したことは、新たな発見だった。もちろん、参加者のさまざまな変容は今までたくさん見てきたが、花子さんは大変高齢であり、また「認知症」とお聞きしていることもあって非常に興味深い。「場」と「役」が創り出す力で、存在が変容したと言える。今後も大切に記憶に残しておきたい大きな出会いの一つであった。

- * 本文では、本質を損なわない範囲で情報の省略をしている。
- * セッション内容の記述は、金光真理さん、岩崎貴子さんのジャーナルを元にしてしている。